

2016 年度 都市環境デザイン会議 公募型プロジェクト

〈全国大会 2017 in 岐阜〉

プロジェクト発表 梗概

2017 年 9 月 29 日・30 日

発行：都市環境デザイン会議

プロジェクト発表プログラム

9 月 29 日（金）：第 1 日目（前半）			備 考
	13:00～ 13:05	趣旨・発表手順の説明（高見理事）	
	13:05～ 13:25	発表①（柳田 良造） モノづくり町並みデザインセミナー	中部ブロック
	13:25～ 13:45	発表②（谷野 正和/藤原 駿） 四国の都市環境デザイン見学事例集とモデルコース作成 （徳島県編）	四国ブロック
	13:45～ 14:05	発表③（中村 伸之） 歩きたくなる緑の堀川通りプロジェクト （堀川みどりのまちづくり会）	関西ブロック
	14:05～ 14:25	発表④（阿部 彰/河田 法之） 東京における整備済み防災船着場の実態調査と 利用性の分析	関東ブロック
	14:25～ 14:45	発表⑤（服部 圭郎） 人を中心とした都市デザインのあり方の研究	関東ブロック
	14:45～ 15:05	発表⑥（埴 正浩） 地酒文化とまちづくり ～北陸 4 県の酒蔵を訪ねて （その 2）	北陸ブロック
	15:05～ 15:25	発表⑦（大西 泰弘） 丸亀旧城下町アーカイブ・プロジェクト	四国ブロック
	15:25～ 15:45	前半まとめと後半予告（伊藤理事・岡理事）	
9 月 30 日（土）：第 2 日目（後半）			備 考
	9:45～ 10:05	発表⑧（岡 絵理子） 「地図アプリ」を用いた街理解の検証とアプリの 改善方向の検討	関西ブロック
	10:05～ 10:25	発表⑨（山下 裕子/尾辻信宣） 講演会「これから、都市をつくる仕事」	九州ブロック
		（発表なし） カトマンス盆地の歴史的環境を有する集落と市街地の 自力復興に関する研究	関西ブロック
	10:25～ 10:45	JUDI 北前船プロジェクト報告（山崎 洋二）	
	10:45～ 10:55	総括 （伊藤理事・岡理事）	

注）各発表の持ち時間は、説明 13 分＋質疑応答 7 分＝計 20 分。

モノづくり町並みデザインセミナー

中部ブロック 柳田良造

はじめに

中部地方は豊田市の車をはじめ、多くの「モノづくり」の拠点が集積し、現在人口一人あたりの製造品出荷額は日本一となっている。その中で古くは戦国期まで遡る伝統を背景に刀剣、鋳物、焼き物、織物、和紙、食品、木工等のモノづくりの伝統は現在まで長くつづき、産業として地域を象徴するだけでなく、地域空間としてもその環境や町並みは地域の中で特色ある風土を生み出している。

本プロジェクトはモノづくり風土のなかで地域空間としても特色を今も保持しているエリア、焼き物の多治見・瀬戸・伊賀、鋳物の桑名、刃物の関、和紙の美濃、織物の一宮・有松などを対象にモノづくり町並みデザインセミナーを開催する。例えば一宮市尾西地方の織物産業全盛期の名残を伝える鋸屋根や煙突のある工場群、伊賀や瀬戸・土岐

の焼き物工房や窯は今も町並みの中に残るが、現役にもかかわらず、現在その存在は埋もれかかっている。プロジェクトの開催を通して、産業遺構としてではない地域の産業・生活の拠点としての復興の可能性をさぐるものである。

モノづくり町並みデザインセミナー三重

日 時 : 2017 年 4 月 1 日 (土)

場 所 : 三重県伊賀市・亀山市・桑名市

参加人数 : 4 名

伊賀焼の里、伊賀豚のテーマパークである「モクモク」、亀山市にある東海道の宿場関宿、鋳物の町桑名での鋳物行灯による『灯街道・桑名宿』をめぐる町並みセミナーを 4 月 1 日に開催した。

名古屋駅から亀山行きの快速で 1 時間、亀山で普通電車に乗り換え関西本線の伊賀上野に着く。約 2 時間の旅である。途中、草津線の分岐の柘植



0401 モノづくり町並みデザインセミナー三重の訪問地図



伊賀市庁舎

から沿線は景色が格段に良くなり、期待感が高まる。JR伊賀上野駅で、車で到着組に合流し、伊賀市庁舎へ。坂倉準三設計の伊賀市庁舎（解体の危機が迫っている）を見学、改めてスケール感のいい名建築の存在を確認する。坂倉準三は岐阜県羽島市の造り酒屋に生まれ、中部エリアにはその作品が多い。続いて今日のメインテーマである伊賀焼の里の伊賀市丸柱（まるばしら）地区へ向かう。着いて、まず伊賀焼伝統産業会館を訪れる。伊賀焼きの紹介ビデオを見る。なかなか勉強になるビデオで、実は信楽焼き（伊賀焼きの里から数kmほどの近傍にある）の粘土は伊賀焼地域の土からとっていて、かつて琵琶湖が現在よりも大きく、その湖底に堆積した土であるそう。伊賀焼きの里は、純農村のなかに窯元が点在するという独特の風景の中にある。一方、信楽焼きの里は以前訪れたことがあるが車来客用の土産物的焼き物店が多く、全体に雑然としている。伊賀の田園風景の中に近年炊飯土鍋でブレイクしている窯元長谷園、ギャラリー yamahon など極めて質の高い場所が点在する。久しぶりに「場の力」という言葉が大きくわき上がってくるのを感じる。お昼は県工業研



旧東海道関宿の町並み



伊賀焼きの里・長谷園

究所窯業研の事務所の木造下見板張建物の再利用カフェに入って珈琲とケーキ。

伊賀焼の里めぐりの次に訪れたの伊賀豚のテーマパークである農事組合法人運営の「モクモクファーム」。1995年の開業の年に来たことがあるのだが、今も人気のようで、多くの来客者で賑わっている。対照的なのが次に訪れた亀山市の旧東海道の宿場関宿。数年前よりもさらに来訪客が減っている感じ。宿場の長さ、伝統的な建物の多さから言って日本でも有数の歴史的な宿場の町並みといえるが、観光客の存在をほとんど見かけることがない。前に来た時に食事してたたずまいの良さに感心した「而今禾」のカフェも今は休店状態で、寂しい。

今日の三重ツアーの最後は鋳物の町桑名での鋳物行灯を活用した試み『灯街道（とうかいどう）・桑名宿』の見学。旧東海道の桑名宿七里の渡跡近くの町並みと公園内に設えられた鋳物行灯による光の演出。魅力的な企画であったが、4月とは思えない寒さに関係者や来客者達にはちょっと気の毒な感じであった。打ち上げ会は桑名名物のはまぐり。焼きはまぐりや鍋で暖まってほっとする。



灯街道・桑名宿のイベント

モノづくり町並みデザインセミナー岐阜

日 時 : 2017年4月8日(土)

場 所 : 愛知県春日井市・岐阜県多治見市・
美濃加茂市・美濃市

参加人数 : 5名

9時半に高蔵寺ニュータウンの入口J R高蔵寺駅に集合。今日の訪問先は場所が結構離れていて公共交通も不便なところなので、前半の移動は車。まず2017年岐阜大会で上映する話題の映画「人生フルーツ」の舞台となった津端修一郎(高蔵寺ニュータウン)を訪問。ニュータウンの地区公園に面した3区画分の敷地にケヤキの雑木林、住宅・蔵、キッチンガーデンが広がる。数年前、NHK「今日の料理」で知って訪れた時には、前の道路越しにお二人の元気な姿を拝見することができたのだが。

次は多治見へ移動。織部ストリートの陶器まつりの見学。毎年来るが、掘り出しものが減ったような気もする。多治見は丘の街、登って降りてを繰り返して笠原地区のモザイクタイルミュージアム(藤森照信設計)が見えてくる。子供の絵がそのまま建物になったような外観だが、内部はタイルの展示場のようで、秋野不矩美術館の質はない。



高蔵寺NTの津端邸



旧美濃太田宿のオイシイワークス



0408 モノづくり町並みデザインセミナー岐阜の訪問地図

多治見から北へ木曾川を超え、中山道旧美濃太田宿にオイシイワークス黒元さんのできたばかりのギャラリーオフィスを訪問。元は庶民的な飲食店だったとは思えないおしゃれな場でお話を聞く。隣には古民家の家具工房ヒュッテファーニチャー、元郵便局のコクウ珈琲と3軒連続したわけで、旧美濃太田宿界隈がさらに面白くなりそうだ。太田宿中山道会館で遅い昼を食べる。

刃物のまち関市を通り、美濃和紙の美濃市へ移動。美濃は長良川中流域の川湊と金森長近が築いた城下町が美濃和紙の里として発展したところ。その町並みは街区のかたちから目の字地区と呼ばれるが、重要伝統的建造物群保存地区である。4月8日は「美濃まつり」の日であった。夕方、伝建地区の通りで地区毎の即興の風刺芝居「仁輪加（に

わか）」を体験する。改めて町並みというものが暮らして地域の文化で彩られるものであることを強く印象づけられるものであった。懇親会は伝建地区の中の町家の居酒屋。通りに面した格子越しに「仁輪加」の気配を感じながらの場はなかなかいいものであった。帰りは美濃市梅山駅から長良川鉄道に乗る。真っ暗な梅山駅のホームで待つが、時刻になっても電車が来ない。ほんとうに電車は来るのだろうかと思ひこくなる。待つ事しばし、遠くから明かりが見えてくる。電車に乗り込むと意外と中は快適で乗客もローカル線にしては不思議な感じ。長良川鉄道は、もと越美南線と言われ越前（福井）と美濃（岐阜）を結ぶはずの鉄道（越美線）の南側の路線であった。次の中部の公募プロジェクトはこのローカル線のデザインセミナーだ。



美濃の町並みでの「仁輪加」



重厚な美濃の町並み



美濃の町並みでの「仁輪加」の光景



長良川鉄道の車内

モノづくり町並みデザインセミナー愛知

日 時 : 2017年6月11日(土)

場 所 : 愛知県瀬戸市・一宮市

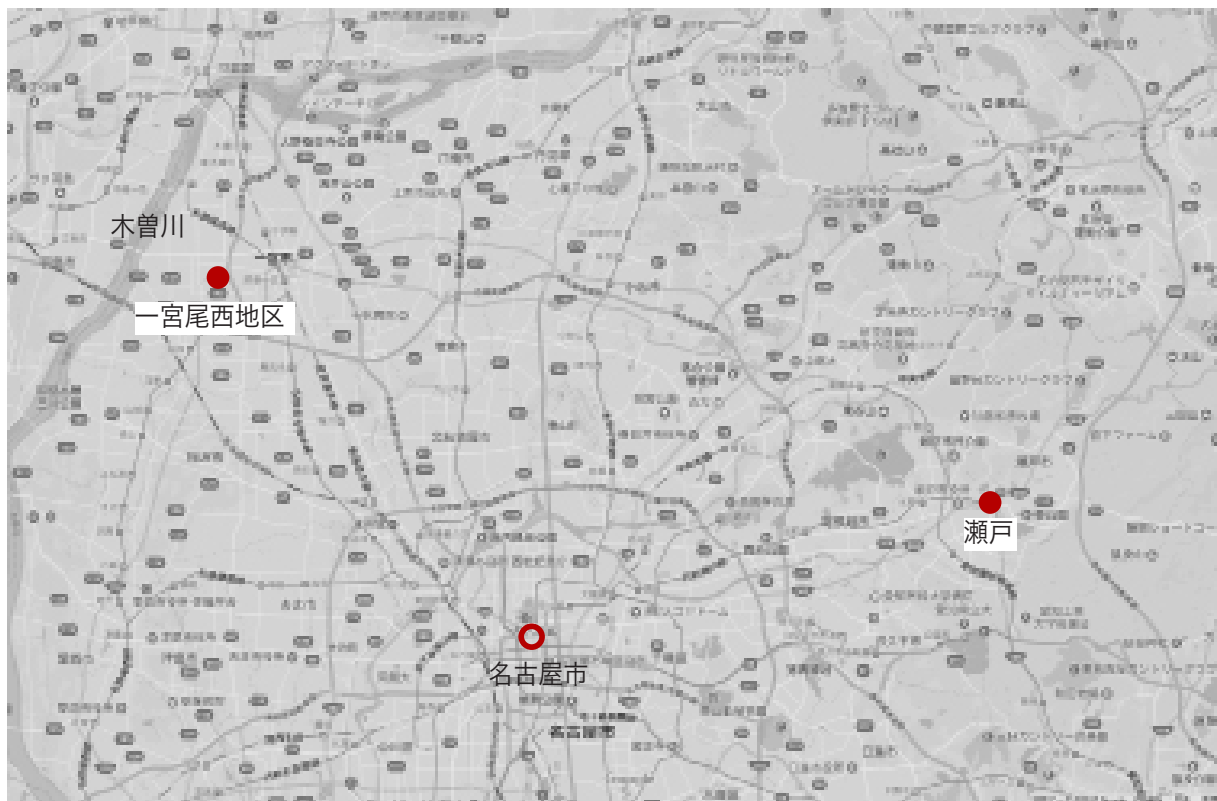
参加人数 : 4名

10時に名鉄瀬戸線の尾張瀬戸駅集合。陶磁器の通称「瀬戸物」の瀬戸である。「瀬戸物」は東日本で用いられ、西日本では「唐津物」の表現が使われるそうだ。いずれにせよ、日本を代表する焼き物の里瀬戸、今日はその町並みめぐりである。瀬戸の街は矢田川が中央を東西に流れ、名鉄の駅や商店街も川沿いに立地する。その周りに無数の小さな丘と谷の地形が繰り返され、住宅地の隙間に焼き物の窯が点在する。

まず駅からタクシーに乗り、2kmほど離れた東洞町の本業窯へ。洞(ほら)という地名は中部地方でよく使われるが、沢や谷を意味する。本業窯は残念ながら今日はお休みだが、登り窯の横に「窯横カフェ」という渋い店がある。そこから丘の斜面沿いに街歩きを始める。住宅の間の木々に覆われた小径を歩いていると、特徴的な土塀に遭遇する。よく見ると土の間に焼き物の断片が交ざり、しか

も工夫をこらして部材を組み合わせて塀をつくっている。それは窯垣(かまがき)と呼ばれ、登り窯に使われていた様々な形の部材を再利用しつくられたものである。ひとつひとつデザインの異なる窯垣が坂道の小径沿いに出現する。常滑にも土管を再利用した塀や小径が残るが、窯垣の方がよりデザインが繊細で美しい。この楽しい路歩きを進めていると、坂の途中に古民家カフェを発見。「窯垣の小径ギャラリー」と名づけられ、窯元の民家を再利用したものだそうで、そこでお茶を頂いての一休み。運営する地元の方々に焼き物の里瀬戸のお話を聞く。その語りは非常に魅力的で奥の深いものであった。窯垣はこの地区だけでなく、瀬戸の街のいろんなところにあるようだ。かつて街のいたる所に窯があつて、その周りにこの窯垣がつくられたようだ。その発祥はどこだったのか調べてみたいものだ。

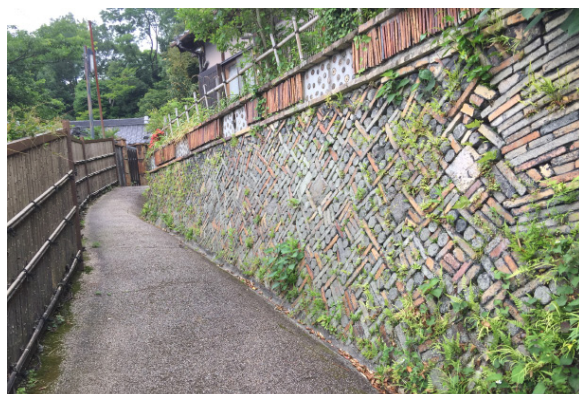
続いて向かったのが、「瀬戸染付工芸館」。市の施設でマルチメディア伝承工芸館という変な名前がついていたが、3年前に今の名前に変更。小振りでカーブした珪藻土と板張りの外観は悪くない。っ



0611 モノづくり町並みデザインセミナー愛知の訪問地図

そこから歩いて焼き物とガラスの工房のある「瀬戸市新世紀工芸館」のカフェで、昼食を兼ねたお茶とケーキ。この近くの矢田川沿いには観光施設も兼ねた焼き物の「瀬戸蔵ミュージアム」という大きな施設もある。これら公的施設はネーミングもそうだが、焼き物の里瀬戸のポテンシャルや魅力を高めるのに貢献しているようには残念ながら思えない。焼き物の里と言えば美濃焼の多治見や土岐にも公的な陶磁器の展示・販売施設がいくつもあるが、訪れてがっかりするところが多い。

瀬戸の街歩きツアーの最後に寄ったのが、駅にも近い「せと銀座通り商店街」というアーケードのかかった小径のような渋い商店街。再利用された建物もぼつぼつ増えているなかで、開放的な感じのカフェ食堂ような場に出くわす。話を聞くと「窯のひろば」というコミュニティカフェで、運営する市民グループで空き地を買い取り、参加型で建物をつくりカフェを運営しているとか。まちの縁側育み隊の延藤先生がサポートしていて、近くにある空き家になった土蔵再生も目指すとか。元気な人達と出会えてうれしくなる。



瀬戸の窯垣の小径



せと銀座通り商店街「窯のひろば」

今日のもうひとつの訪問地が一宮尾西地区ののこぎり屋根群だ。名鉄とJRを乗り継いで約1時間、3時過ぎに一宮着。タクシーで平松毛織へ。平松毛織では「のこぎり二 (Second Life of Nokogiri)」というコンセプトで毛織物産業で栄えたのこぎり屋根工場の再生をめざし、「のこ座」という連続勉強会や学校、Yut@cafe ゆたかふえを運営。その日は第10回の「のこ座」でテーマは「尾州」。世界三大毛織物産地と言われる一宮尾西のアピールのために生まれた「尾州」という新たなブランドの話。講師が岐阜の大学での先輩教員でびっくり。久しぶりにお会いしてご挨拶。のこぎり屋根の空間にはハイサイドから絶妙な光が入り、照明なしで心地よい場の中での講演会を聞いた。いい時間を過ごせて、ここでも「場の力」を改めて再認識する。まとめ

今回のツアーの成果は伊賀焼の里、美濃の町並み、瀬戸窯垣の路、尾西ののこぎり屋根などモノづくりの里に存在する「場の力」の再発見につきる。一方で地域の公共施設の不毛さ。「場の力」や地域の魅力を阻害する建築の姿に考えること多し。



尾西ののこぎり屋根と再利用カフェ（平松毛織）



「のこ座」の会場

四国の都市環境デザイン

見学事例集とモデルコース作成

四国ブロック 高知工科大学

0. 目的、目標

都市環境デザインは、建築、土木、造園などの分野を超えた共同作業で成り立っており、他分野について学ぶ必要がある。分野横断的に事例を網羅した資料がない場合、見学時に事前調査で多大な時間と労力を費やし、優れた事例を見逃すことが考えられる。四国の様々な分野を網羅したデザイン事例を収集・整理することで、優れた事例を見逃すことがなくなる。見学のモデルコースと資料集を作成し、web 公開することで誰でも使えるツールとして完成させることを目標とする。

1. 作成工程

主な作業工程は以下の通りである。詳細は次項より記述する。

事例収集・マップ作成

- (1)事例視察
- (2)モデルコース選定
- (3)パンフレット作成
- (4)ホームページ作成
- (5)事例見学ツアー実施

2. 事例収集と整理

2-1. 徳島県内の事例の収集

書籍やインターネットから、徳島県内に存在する建築・土木構造物・文化遺産等の情報を収集し、整理した。

各事例では主に

- (1)取り上げた建築・土木等の名称
- (2)住所
- (3)緯度・経度
- (4)関連する情報（URL 等）
- (5)備考

以上の項目を整理した。

2-2. 事例マップの作成

収集したデータを基に、事例マップを作成した。

3. 事例視察とモデルコース作成

3-1. 事例選定

200 程度ある徳島県内の事例を、優先度の高いものと低いものに分類し、優先度の高いものから調査した。調査員が実際に現地に赴いた事例の中から幾つかを東部、西部、南部ごとに選別し、モデルコースを作成した。モデルコースの条件として、「徳島阿波踊り空港を利用して、日帰りで帰ることが出来るコース」を設定した。

モデルコースを選定する際のポイントとして

1. 調査員が実際に確認して興味を引かれたもの、見るべき価値があると感じたもの
2. 調査員が要した見学時間と移動時間を基に、日帰りで回ることが出来ること
3. 空港からの距離が極端に離れすぎでないこと
4. 一般的な認知度は低いが、これから広く周知していきたいもの
5. 見学に不向きな場所（病院など）でないこと、見学に特別な許可等を要しないこと
6. 付近への車両の駐車がある程度容易であること

以上を念頭にコースを選別した。

以下コース別説明

西部コース

- ①うだつの町並み
- ②大谷川堰堤
- ③貞光の二層うだつ
- ④土釜橋

東部コース

- ①鳴門市庁舎
- ②大谷焼森窯登窯
- ③ドイツ橋
- ④第十堰
- ⑤第十樋門
- ⑥佐古配水場

南部コース

- ①太龍寺
- ②旧桜谷発電所
- ③松坂隧道
- ④由岐漁港

4. パンフレット作成

パンフレットはそれぞれのコースごとに、3種類作成した。形状検討として、「持ちやすさ」「十分な情報量の確保」の2点を両立するために、両側観音開きを採用した。事例の説明や、一目でコースの位置関係がわかる地図などを掲載した。



5. ホームページ作成

それぞれの事例のページには、概要や受賞歴を掲載しており、自分たちが実際に訪れた時に感じた不便なことも、車で行く際の注意点として記載している。



6. 事例見学ツアー



HPの試運転やモデルコースの確認を兼ね、5月に東予地方のツアーを開催した。

7. 今後の活動について

今年は昨年の愛媛県に続き、徳島県を舞台にモデルコースの作成を行なった。四国の残り2県に関しても行いたいと考えている。

歩きたくなる緑の堀川通プロジェクト（京都市）

～戦争・高度経済成長からの景観再生～

関西ブロック 中村伸之

1. 経緯

平安時代に開削された堀川と両側の通りは、1945 年の建物疎開（米軍の空襲対策）で幅 50 メートルの防火帯となり、高度経済成長期には車道を拡幅するために川が埋め立てられて、京都市を代表する大通りとなった。

しかし、御池通から五条通までの区間は広幅員に見合った豊かな緑がなく、魅力や親しみが感じられない。

2016 年 4 月の中京マチビト Café（中京区主催の市民集会）をきっかけに「堀川みどりのまちづくり会」が立上がり、堀川通の緑やにぎわいを語り合い、地域の活性化を目指す人々のつながりができた。



1960 年代の堀川通



現在の堀川通

2. 内容

堀川通の緑の景観づくりを考えるために、①地域の歴史を聞きとるヒヤリング、②景観や生業を調べる町歩き、③その成果を共有する懇話会、④未来の景観を考えるまちづくりカフェ、⑤以上の成果をまとめたパンフレットを作成した。

【日時・場所・参加者】

・2016 年 4 月 28 日 19 時～20 時「中京区役所」約 80 名、中京マチビト Café で「堀川通を語ろう」をテーマにしたテーブルトーク。

・8 月 25 日 19 時～20 時「中京区役所」約 80 名、中京マチビト Café で「歩きたくなる堀川通」をテーマにしたテーブルトーク。

・8 月 30 日 19 時～20 時「中京区役所」9 名、「歩きたくなる！！堀川通」懇話会堀川通の景観写真や参考となる事例を持ち寄って発表。

・9 月 18 日 15 時～17 時「堀川通（東）を町歩き」6 名、ホテルやマンションの建設ラッシュの様子、地元の方の意見などを伺った。

・10 月 8 日 15 時～17 時「堀川通（東）を町歩き」6 名、町家を活用した店舗の新しいビジネスについてお話を伺った。

・2017 年 1 月 18 日 18 時～20 時半「中京区役所」24 名、「堀川みどりのまちづくり Café」地域の皆さんが堀川通みどりまちづくりのアイデアを語り、造園家・河合嗣生氏がラフスケッチを描いた。

・3 月末に冊子「堀川みどりのまちづくり」を発行した。

3. 活動の成果

活動の主体となる「堀川みどりのまちづくり会」を立ち上げることができた。

堀川通の東と西では地域イメージ・ブランド意識が違い、一体感が薄い。大通りで分断されていることがその一因である。東側は激しい開発の波にさらされ、西側は比較的昔の雰囲気を残しており、それぞれの魅力を補い合う多様な関係性が生まれるだろう。

町家を借りてビジネスを興して地域に参加している人たちや、屋上緑化グループや街路樹サポーターなど緑を育てる人たちと知り合うことができ、まちなかにも生き物がたくさんすんでいて、生物多様性があることも分かった。

4. 今後の課題、方向性等

ワークショップの中で「二つの世界遺産をつなぐ緑の都大路」というキャッチコピーが生まれた。世界遺産とは、西本願寺と二条城である。京都駅－西本願寺－二条城は約4キロの歩ける距離である。緑の景観を整備することで、強力な地域ブランドが生まれる潜在力が高い。

「みどりの堀川通」のイメージがまとまってきたので、小さな空間からそれを実現することが今後の課題である。

堀川通の歴史・自然・生業を伝えるマップやフリーペーパーなどを年1回発行し、みどりのまちづくりを地域にアピールする。

また、フリーマーケット、店舗や名所を回遊するイベントを企画し、そこで緑化のモデルを

展示する。緑化を支援する体制をつくる。

このようなことを話し合っゆきたい。

写真上、中：「堀川みどりのまちづくり Café」

写真下：みどりの堀川通のイメージ



東京における整備済み防災船着場等の 実態調査と利用性の分析

関東ブロック 阿部 彰・河田法之（一般社団法人まちふね みらい塾）

【1】 緒言

まちふね みらい塾は「東京の水辺を再生する」「水辺の規制を乗り越える」「水上交通の重要性を共有する」を目標とする一般社団法人であり、船着場の情報を一元的に把握し、その設計指針作りに役立てることを目的に、東京における整備済み船着場の実態調査を行なっている。本稿ではその内容を報告する。

【2】 背景

船舶は環境負荷が低いため（図1）、阪神大震災を契機に整備された防災船着場など、現在東京に存在する100以上の船着場を日常的に使用できれば水上交通の活性化に繋がり、高効率で環境負荷の小さい交通システム構築が可能と考えられる。

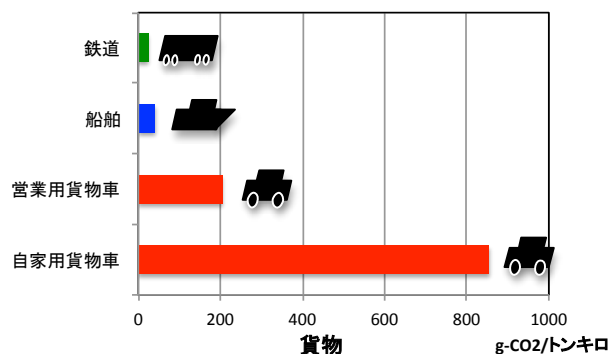


図1 貨物輸送量当たりのCO2排出量※1

国土交通省は「船着場の開放化」を示唆し自己責任による船着場の自由使用を標榜しているが※2、実体として開放化に向けた活動は見られない。

また、実際に船着場を使用する場合に必要な棧橋形式や係留用設備など水上（船上）からのアクセス性、他の交通機関や周辺施設といった地上からのアクセス性、管理者や整備状況等の実態が把握しにくいのが現状である。

【3】 調査対象及び方法

国交省や都、区が公開している情報などからリストアップした首都圏の河川・海岸にある約160箇所の船着場を調査対象とした。

このリストにおいては、実用上必要な情報が不十分であるため、小型船舶を用いて対象船着場を巡り、可能な限り接岸して以下の項目について調査・計測を実施し状態の把握を行った。

- ① 存在（位置確認）
- ② 仕様（形式・全長・全幅・天端高さ・水深）
- ③ 接岸性（接岸用設備、接岸の容易性）
- ④ 整備・管理及び周囲の状況

【4】 調査結果

調査結果概要として、水域（河川、海岸）毎の管理者・形式別の船着場数を表1に示す。

表1 船着場調査結果概要

	合計	管理者						形式		
		民間	区	都公園協会	都	国	不明	浮棧橋	固定棧橋	形式不明
荒川	11	0	1	0	0	10	0	4	7	0
江戸川	5	0	3	0	0	2	0	0	5	0
旧江戸川	11	0	2	0	2	0	7	6	0	5
新中川	5	0	1	0	1	0	3	1	2	2
中川	7	0	3	0	1	0	3	0	4	3
旧中川	10	0	10	0	0	0	0	0	10	0
北十間川	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0
横十間川	3	0	2	0	0	0	1	1	2	0
小名木川	16	0	2	0	1	0	13	2	14	0
大横川	2	1	1	0	0	0	0	1	0	1
新河岸川	5	0	2	0	0	1	2	3	1	1
隅田川	25	1	6	0	13	0	5	17	5	3
神田川	3	0	2	0	0	1	0	2	1	0
日本橋川	5	0	4	1	0	0	0	1	4	0
目黒川	2	0	2	0	0	0	0	0	2	1
呑川	2	0	1	0	1	0	0	0	0	2
多摩川	3	0	0	0	0	2	1	0	2	0
海老取川	2	0	1	0	0	0	1	2	0	0
内川	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0
葛西海岸	3	0	0	0	3	0	0	2	0	1
東京港	16	11	0	3	1	0	1	4	2	10
砂町運河	2	1	1	0	0	0	0	2	0	0
豊洲運河	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0
朝潮運河	2	1	1	0	0	0	0	2	0	0
京浜運河	18	1	4	0	9	0	4	12	5	1
芝浦運河	2	0	0	0	0	0	2	2	0	0
計	163	16	52	4	32	16	43	66	67	30

江戸川、旧江戸川、新中川、大横川、呑川は未調査

以下詳細について説明する。

（1）存在（位置確認）

未調査の河川を除き、リストアップした船着場のうち、今回の調査で存在が確認できなかったの

は横十間川で工事中と思われる1箇所、京浜運河で5箇所あった。

また表1で管理者が「不明」となっているのは、現場にも表示が無いため管理者の確認ができず、問い合わせ先がわからない船着場である。

(2) 仕様

浮棧橋と固定棧橋はほぼ同数であった(図2)。浮棧橋は水位に合わせて上下するため天端高さ(水面から船着場床面までの距離)が一定となる(図3)。固定棧橋でも水位変化への対応可能のため階段状となっている船着場(図4)もあるが、浮棧橋よりも利便性は劣る。



図2 浮棧橋・固定棧橋設置状況



図3 浮棧橋(神田川・和泉橋防災船着場)



図4 階段状固定棧橋(中川・西新小岩船着場)

(3) 接岸性

接岸用設備として防舷材と係留用のボラード、クリートなどの状況を確認した。

荒川には大型船の接岸を想定していると考えられる大型の防災船着場が多く、例えば小松川リバーステーションは全長77mに対して防舷材の数は12箇所である(図5)。一方、隅田川の新川防災船着場は全長24mに対し防舷材は27箇所に配置されている(図6)。また、旧中川の平井船着場のように防舷材が設置されていない船着場もある(図7)。



図5 防舷材間隔の大きい小松川リバーステーション(荒川)

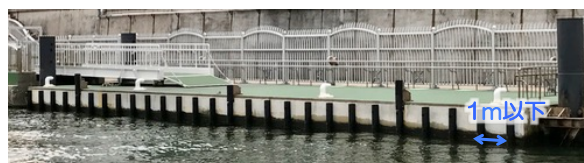


図6 防舷材間隔の小さい新川防災船着場(隅田川)



図7 防舷材の無い平井船着場(旧中川)

船舶を接岸させる際に必要なボラードやクリートといった係留用設備(図8)は、小名木川や目黒川などの小規模な船着場で設置されていない例が見られた(図9)。

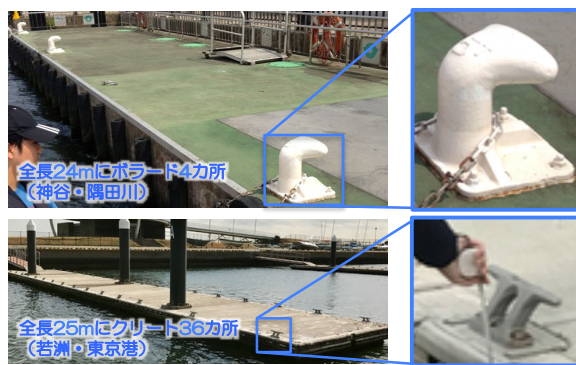


図8 係留用設備の設置例



図9 係留用設備のない船着場（小名木川）

(4) 整備・管理、周囲の状況

①整備状況

水上バスの運航がなく使用頻度の低い荒川の防災船着場（秋ヶ瀬リバーステーション）は雑草や苔に覆われ、滑って転倒する危険がある（図10）。また日本橋川や神田川など中心市街地を流れる河川の船着場でもゴミや落ち葉の堆積、設備の破損などが見られ良好な整備状態とは言い難い。



図10 苔生した秋ヶ瀬リバーステーション（荒川）

②他の交通機関（鉄道）とのアクセス

隅田川、日本橋川、神田川など中心市街地にあり駅が多く商業施設や観光スポットが集中している地域では、駅から半径500m以内に船着場が存在するケースが多く、鉄道との連絡が容易で利用可能性も高い（図11）。

一方荒川、新河岸川、中川などの場合、船着場は駅から遠く（図12）、運動場などは整備されているが商店街など街の賑わいからは距離がある。

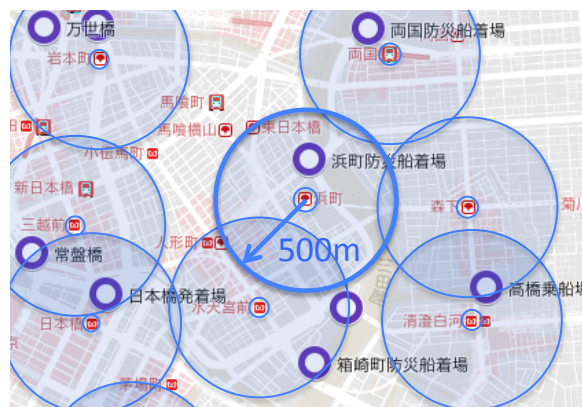


図11 隅田川沿い鉄道駅半径500mの範囲（◎：船着場）

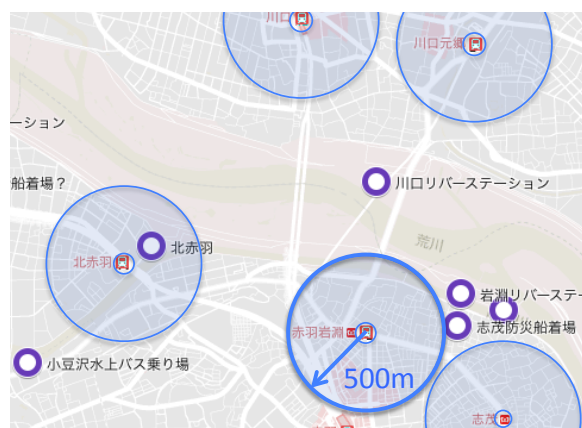


図12 荒川沿い鉄道駅半径500mの範囲内（◎：船着場）

③医療機関とのアクセス

防災拠点として船着場を活用するならば、災害時に負傷者と医療機関を結ぶアクセス性が重要となる。その観点から船着場の設置状況を確認する。

隅田川の場合、医療機関から半径500mの範囲に船着場が存在しており（図13）、この点だけ見ればアクセス性は良好と考えることもできる。



図13 隅田川沿いの医療機関と船着場

ここで両国防災船着場と最寄の医療機関（同愛記念病院）に着目する。病院からの直線距離は約360mであるが、この道程を、身動きできない負傷者を段差や車道を乗り越えて搬送することは容易でない（図14）。ましてや災害時は道路損傷等のため一層移動が困難になると考えられる。



図 14 両国防災船着場から医療機関までの道程

【5】東京における船着場に対する課題と提案

(1) 船上からのアクセス性

東京には満潮・干潮の影響を受けて水位が変化する感潮河川が多く、固定栈橋は水位変化によって天端高さが変動するため船上からアクセスしにくい。従って乗降利便性の向上には天端高さが一定となる浮栈橋化の推進が有効である。

また、防舷材間隔が大きいと小型船舶の場合は船体が岸壁に接触し損傷の恐れがあるため接岸が困難となる。防舷材間隔の縮小(図 15)や、水平方向の防舷材適用で接岸性が向上する。

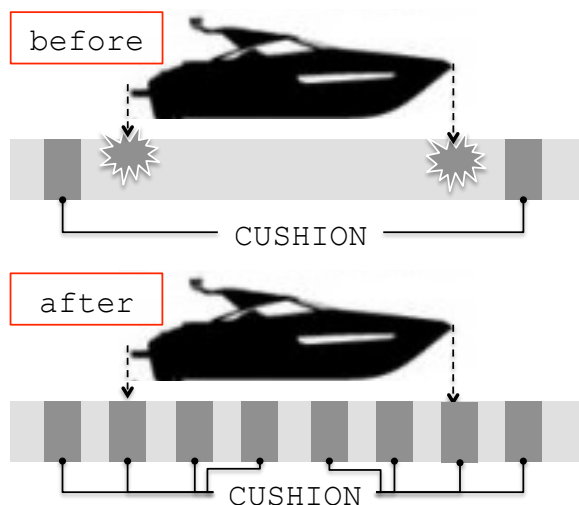


図 15 防舷材配置方法による接岸性の向上

更に接岸用設備の整備、例えば船体引き寄せ用のフック引っ掛け場所の設置だけでも低コストで

アクセス性を大きく向上させることができる。

(2) 地上からのアクセス性

他の交通機関とのアクセス向上施策は多くの既存施設や利害関係者が関わるため、一朝一夕に実現することは困難であるが、防災目的を謳うならば河川近傍の医療機関には水上からの直接乗り入れを可能にするなど、実用を現実的に想定した船着場設置が必要となる。

【4】(4) に挙げた課題に加え、船着場入口は常時施錠され、使用の際は事前に管理者へ出向いて直接鍵の受け渡しが必要となる煩雑な管理方法のため、平常時でも簡便に使用することができないのが懸案である(図 16)。

防災目的で設置された船着場でも、平常時に使用できないものは非常時も使用できない。



図 16 施錠された板橋リバーステーション(荒川)

昨今のカーシェアリングやシェアサイクルはスマホひとつで使用登録から解錠・施錠、課金まで簡便に実施でき、使用者の利便性が高い。このような運用の仕組みなどを参考とした施策を実施し、平常時の船着場使用の容易性を推進することが、船着場の地上からのアクセス性を向上させ、水上交通を交通機関の選択肢として認識し、ひいては水上交通を活性化させるための鎗矢となるだろう。(了)

【参照】

※1 国土交通省 HP

http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/environment/sosei_environment_tk_000007.html より作成

※2 船着場の開放について：国土交通省関東地方整備局「防災船着場を活用した舟運の推進」

http://www.ktr.mlit.go.jp/ktr_content/content/000105758.pdf など

人を中心とした都市デザイン

国際交流センター 服部圭郎

世界中で「人を中心とした都市デザイン」が志向されている。その胎動は1950年代のヨーロッパにおいて見られ始める。1953年にロッテルダムのランバーンにおいて、最初の歩行者専用の商業空間がつくられた。そして、同年にはドイツのカッセル市において、最初の歩行者専用の街路トレッペンストラッセがつくられる。

その計画の考えとしては、歩車分離という発想が基本にあり、その後のボンエルフやシェアド・スペースとは真逆の発想ではあったが、人間中心の都市空間を都市計画的につくる嚆矢であったとはいえるであろう。現在、このトレッペンストラッセを訪れると、そのデザイン的洗練のなさにがっかりするが、当時は大きな注目を浴び、同年、シュツットガルトやキールにおいても自動車を排除した商業空間をつくる計画を策定することにし、その後も多くのドイツの都市が模倣する。現在、ほとんどのドイツの都市の都心部において歩行者専用の商業空間が存在するが、その多くは50年代から60年代において整備されたのである。ただ、トレッペンストラッセは当初から歩行者専用空間として整備されたが、他の都市においては、既存の道路を改修したというケースが多かった。

このようなオランダ、ドイツの流れとは別に1960年代のアメリカにおいて、エポック・メイキングな出来事が起きる。1962年にジェイン・ジェイコブスという高卒のジャーナリストが当時の大規模な再開発を痛烈に批判した「The Death and Life of Great American Cities」を著したのだが、これが大きな衝撃を持って受け止められたのである。そして、それまでの不動産開発での利益を優先した都市開発のあり方に疑問を呈することになり、その影響はアメリカはもちろんのこと、世界中に余波をもたらす。

特にその後の都市デザインに影響を与えたのは、1960年代後半につくられたコペンハーゲンのストロイエであろう。これは、市の都市計画局の職員の提案から実現されることになったプロジェク

トであるが、都心部から自動車を追いだし、歩行者専用空間へと転換した。このストロイエを人々がいかに利用しているのかを研究したのが、若きヤン・ゲールであり、彼がその研究結果などを踏まえて1971年に著した「Lie between Buildings」は、都市における公共空間を考えるうえでのバイブル的な本となる。

ヤン・ゲールは地元コペンハーゲンはもちろんのこと、現在に通じる「人を中心とした都市デザイン」を具体化させるために、それこそ世界中から招聘され、その教えを請われている。有名なところとしては、メルボルン、ニューヨーク、シアトル、ロンドン、モスクワなどが挙げられる。ちなみに、1990年代にヤン・ゲールは名古屋に招聘され、いろいろと有益なアドバイスもしたのだが、ゲール氏に言わせると「ほとんど無視された」そうである（出所

[http://www.hilife.or.jp/wordpress/](http://www.hilife.or.jp/wordpress/?p=3689)

?p=3689)。これは何を我々に伝えているのか。

世界中の都市が「人を中心とした都市デザイン」を志向している中、相変わらず日本の都市は逆行し、自動車を中心とした都市デザインを進めており、ヤン・ゲールのような重鎮のアドバイスも無視をしてしまう状況にある。

ただし、そのような中、そのようなトレンドにあがなうよ動きが我が国でもみられつつある。今回の研究では、そのような事例を研究し、なぜ、そのようなプロジェクトが実現されたのか、その背景を調べた。それらの調査結果は「JUDI 通信」にて発表されている。これらは JUDI 国際委員会の HP からダウンロードすることができる

(<http://hattorikeiro.wixsite.com/judi-international/news>)。

今年度、調査することができたのは、「警固公園」、「とんぼりウォーク」、「柏の葉キャンパスエリア」「姫路駅前トランジット・モール」、の4つであった。以下、それらの概要を整理する。

警固公園

警固公園は、九州一の繁華街で福岡市の都心に位置している。東に西鉄福岡駅が隣接し、ソラリアプラザ、三越など商業施設が取り囲み、南には警固神社に接している。2012年に再整備されて多くの人々が憩い語らう場となり、周囲の施設へ行き交う人々の往来の場として、福岡の都心を元気づけている都市公園である。その設計時において、以前の公園の詳細な利用実態を調べ、その結果をデザインに反映させたことで、極めて利用勝手のよい広場的空間が福岡市の都心に出現した。



トンボリウォーク

道頓堀川水辺整備事業は、水都大阪プロジェクトの事業の一つとして平成7年に着手された。水辺整備事業は①2カ所の水門整備による水位調整、②親水性の高い遊歩道の整備、③沿川の大規模開発との連携、④沿川施設との協調による利活用の促進を同時に狙っている。道頓堀の中でも戎橋付近は大阪を象徴するシンボル空間の一つとして、遊歩道と沿川整備には大きな期待が寄せられたが、JUDI 関西を中心としたグループによって、広場性の高い歩行アメニティに富んだ空間が整備された。



柏の葉キャンパスエリア

柏の葉キャンパスエリアは、秋葉原-つくば間に2005年に開通したつくばエクスプレスの沿線開発地区である。千葉県・柏市・東京大学・千葉大学・三井不動産といったまちづくりのキープレイヤーが共同で策定した将来ビジョン「柏の葉国際キャンパスタウン構想」のもと、連携拠点であるUDCK（柏の葉アーバンデザインセンター）を中心に、10年にわたり都市デザインに取り組んできた。UDCKによる都市デザインは、①ガイドラインの策定、②個別開発のデザイン協議、③公共空間の高質化デザイン、④公共空間のマネジメントスキームの構築、⑤情報発信と啓発、と多岐にわたる。



姫路駅トランジット・モール



交通結節機能を向上させ、地下街の活性化も図れるような姫路駅前広場の整備計画を策定することとなり、2006年に姫路市はその計画も含めた「姫路市都心部まちづくり構想」を発表する。しかし、この構想では駅前ロータリーは自動車中心の空間デザインがされた。この案に疑問を抱いた市の各種団体は、様々な代替案を提示し始める。そして、専門家と市民が協働して、つくられたのが日本初のトランジット・モールであった。

地酒文化とまちづくり（その2）

～北陸4県の酒蔵を訪ねて～

北陸ブロック 埴 正浩、上坂達朗、新田川貴之

はじめに

日本酒は、「國酒」と呼ばれる。海外からの賓客をもてなす晩餐会や様々なイベントなどにおいても日本酒が使用され、また、地方自治体では「日本酒で乾杯」条例を制定するところが増えている。

北陸では、日本酒の年間消費量や、酒蔵数も多いことから、地酒はある意味、北陸4県の共通の貴重な地域資源であると考えられる。

北陸ブロックでは、これまで、北陸4県の酒蔵を訪ね、酒造りそのものや地域のまちづくりとの関わりを調査した。その結果、「地酒には、酒米と水と作り手が欠かせないことや、食文化とも密接に関係している」ことがわかった。

例えば、酒米は、兵庫県産山田錦や北陸産五百万石が使用されていること。また、水は、地下水や伏流水などが利用されており、酒蔵の立地に大きく影響していること。さらに、作り手は、かつては能登杜氏や越後杜氏など季節労働者が多かったが、現在では、社員化されていること。加えて、酒の辛口・甘口、濃醇・淡麗などは、魚介類を中心とした北陸の食文化に影響していることなどがわかった。

本調査は、北陸における酒蔵という地域資源を深掘し、酒蔵を核とした地域づくりの可能性を探ることを目的としている。

そこで、今期は、北陸の3つの酒蔵を訪ねた。また、北陸における酒米の使用状況や、酒蔵の立地の決め手となる地下水や伏流水などがどのように分布しているのか、さらに、どのような志を持って、作り手（杜氏）が地酒を造っているのかについても重ねて調査した。

北陸の4県の酒蔵めぐり

① 福鶴酒造（富山県富山市八尾）

福鶴酒造は、「おわら風の盆」で有名な富山市八尾に、嘉永元年（1847年）に創業した伝統と歴史のある酒蔵である。

昭和56年（1981年）に発売した「純米酒 風の盆」は、農薬・化学肥料を一切使用しない有機JAS認定を受けた有機栽培米コシヒカリ100%を原料に造った酒で、その芳醇な味わいと共に、安全・安心の面からも品質の向上を目指している。

酒米は、大吟醸には兵庫県産山田錦を使用し、それ以外は、地元産の五百万石、契約農家の石川県産コシヒカリ、地元産てんかくも使用している。その割合は、1:3:2:3である。

水は、地下水でミネラル成分の低い軟水である。井戸の深さによって味は異なり、辛口に造っても甘く感じる。

作り手は、新潟杜氏（柏崎）で、蔵人は、全て社員。杜氏も減ってきていることから、社員のみによる酒造りの体制を目指している。

酒づくりのこだわりは、一般的には醸造用の乳酸を加えて、約半月で酒母を仕上げるが、「生酛（きもと）系造り」といわれる昔ながらの製法で約2倍の1ヶ月をかけて造る。機械はほとんど使わず、大吟醸は絞り袋で絞っている。

また、食文化も多様化していることから、80%精米で旨み成分の高いリーズナブルでB級グルメに合う酒や、「和のシャンパン」というコンセプトで、酵母の特性を活かした微発泡酒など、若い社員の発想と昔ながらの製法を合わせて造っている。

地域との関わりでは、風の盆の舞台ともなることから、町並みに調和した店構えとしている。



八尾の町並みと調和した福鶴酒造の外観

② 数馬酒造（石川県能登町宇出津）

数馬酒造は、明治2年（1869）に創業し、世界農業遺産に認定された能登半島北部の能登町に位置する。石高は、年間約900石で、濃醇でキレのある能登産にこだわった酒造りを目指している。

酒米は、その9割が能登産で、県内初の山田錦の契約栽培をはじめ、石川県産の酒造好適米の石川門や五百万石を使用している。

4年前から、契約農家と耕作放棄地を開墾する「水田作りからの酒造り」を開始した。農薬・化学肥料を使用しない酒米の栽培を増やし、「水田環境特A地区」という評価を得た。また、100%自社精米で、酒米の状況によって、精米の時間調整を行っている。

水は、近くの山中の湧水を使用している。毎日、タンクローリーで運び、水質は軟水である。

作り手は、2年前に杜氏制を廃止した。平均年齢32歳の若手による酒造りを行っている。

地域との関わりでは、祭りをはじめ、魚介類など食文化とのつながりが濃い。また、1995年に体験型会員制組織「MY-SAKE倶楽部」を発足させ、田植え・稲刈りや酒造りを通して、能登の四季を楽しんでもらっている。

数馬酒造では、世界農業遺産である能登の里山の耕作放棄地や人手不足を農家や酒飯店・飲食店、そして顧客の共感を得て、酒米作りを通じて共に問題解決をする「シェアと循環」により、持続可能な酒造りを目指している。

例えば、能登島の耕作放棄地を解消するために、地元農家が酒米を作り、それをういて数馬酒造が酒造りを行い、能登島内外で販売されている。

また、蔵元も蔵人も若い世代が多く、今後がさらに楽しみな酒蔵である。

③ N-project

N-projectは、「学生が能登も農業も日本酒も盛り上げる！」をコンセプトに、石川県を拠点として活動している。県内の学生が、地元の農家や酒蔵と連携し、米作りから酒の仕込み、ラベルのデザインまでプロデュースをしている。2014年3月に発足した。

学生が中心となり、米農家の（株）ゆめうらら、数馬酒造、高桑美術印刷の連携、協力を受けプロジ

ェクトを進めている。活動に当たっては、いしかわ里山創成ファンド事業に採択され資金を得た。

現在は、金沢大学、金沢美術工芸大学、石川県立大学、北陸大学、富山高等専門学校の学生16名で活動している。

これまで、学生と地元企業がコラボレーションして、「chikuha N」という商品を生み出した。4合瓶で、1年目に1000本、2年目に2000本、3年目（現時点で）は2300本生産している。

N-projectの初代代表の又木実信氏は、地元の大学卒業後、一旦は東京の企業に就職したが、酒造りが忘れられず、Uターンして現在は数馬酒造の蔵人となり、酒造りを学んでいる。



N-projectのメンバーによる田植え

④ 久世酒造（石川県津幡町清水）

久世酒造は、天明6年（1786）に創業し、金沢近郊で古くから酒蔵を営んできた。創業期以来、酒米作りから酒造りを一貫して生産している日本唯一の酒蔵でもある。石高は約500石である。

酒米は、創業期以来、自田にて独自の長生米という米を栽培している。長生米は、心白が大きいのが特徴で、山田錦よりも大きい。しかし、心白部分はもろく、精米率が低いため、吟醸酒ではなく純米酒となる。

水は、自社地下水（硬水）と霊水（清水）の湧水（軟水）を使い分けている。清水は、地域の住民と一緒に守り、誰でも利用することが出来る。久世酒造では、自家栽培の長生米で、仕込み水を硬水と軟水で仕上げた2種類の酒が楽しめる。

作り手は、かつては能登杜氏であったが、数年前に廃止し、現在は社員化している。

地域との関わりでは、清水は、年4回、公的機関による水質検査があるが、その費用を津幡町と

久世酒造が負担し、地域と共に守っている。

また、久世家は地元清水神社の総代を代々務めている。地元の喧嘩獅子ともいわれる獅子舞の祭りは、久世酒造の前の交差点で行われ、振る舞い酒を提供している。

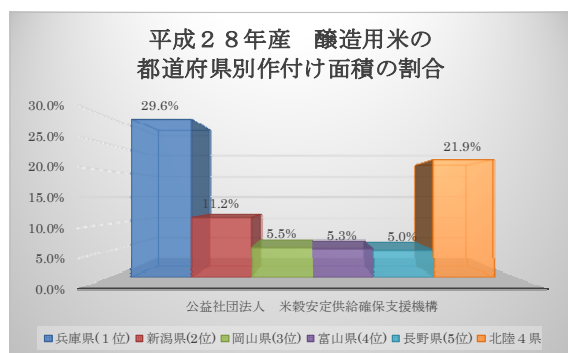


酒蔵が地域住民と守る清水

北陸の地酒の特長について

①酒米について

醸造用米の都道府県別作付面積の割合(公社 米穀安定供給確保支援機構、平成 28 年度)をみると、兵庫県が 29.6%と最も多く、北陸 4 県を足し合わせても 21.9%であり、兵庫県には及ばない。



醸造用米の都道府県別作付面積の割合

次に、米の農産物検査結果における醸造用玄米品種別検査数量(農林水産省、平成 28 年度)をみると、山田錦が 37,092 ト、五百万石が 24,747 トと、この 2 種類で全体の約 6 割を占める。また、山田錦は、全国の 34 県、五百万石は 21 県で生産されている。

北陸 4 県における酒米をみると、吟醸酒では、兵庫県産の山田錦が主流ではあるが、純米酒や本醸造などでは、地元産の酒米が多く使われている。新潟県では、本県で育成された五百万石が多い。

富山県では、雄山錦、石川県では石川門、福井県ではおくほまれなど、地元の酒米を使用している。

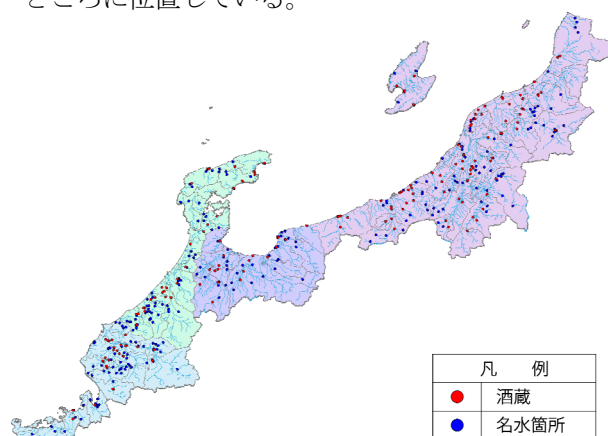
例えば、石川県では、吟醸酒に適する山田錦が栽培しにくい。そこで、山田錦並みの吟醸酒用酒米として育成されたのが、石川門である。栽培量はまだまだ少ないが、独自の酒米を開発している。

このように、北陸の気候風土にあった酒米を開発・育成していくことが求められている。

②水について

酒造りには、大量の水が不可欠である。日本酒の成分の内、80%は水であり、日本酒に関わる水は、仕込み水、洗米水、米を蒸す水、割水のほか、ビンや機材の洗浄水など、純米重量の約 50 倍ともいわれる大量の水が必要である。

また、酒造りには、豊富な水が確保できるところが立地の条件となる。北陸の酒蔵と水系の関係をみると、いずれも、豊富な湧水など水脈のあるところに位置している。



代表的な湧水と酒蔵の位置図

一方、水には、軟水と硬水がある。硬水は、ミネラル分が多く含まれ、鉄分が少ないため、安定した酒造りが出来る。一方で軟水は、低温でじっくりと発酵を進め、なめらかで香りの高い吟醸酒などをつくる事が出来る。例えば、灘の男酒、伏見の女酒といわれるが、灘の宮水で造った酒は辛口となり、それよりも硬度の低い水で仕込んだ伏見の酒はまろやかになるという。

北陸では、ほとんどが軟水であり、白山・立山山系や北アルプスに続く峰々を源とした伏流水や湧水である。また、名水 100 選に選ばれた地下水を仕込み水に用いている酒蔵もある。

③作り手について

作り手は、越後杜氏、能登杜氏が有名であるが、杜氏の数、減少傾向にある。

一方で、正社員とした蔵人に酒造の技術を学ばせ、マイスターとして育成している酒蔵もある。北陸の酒蔵の多くでは、杜氏制を廃止し、正社員として雇用していることと、若手の蔵人が増えているという印象であった。

このように、杜氏の減少から蔵人の社員化は、今後ますます進むと考えられ、杜氏の技術の伝承が求められる。

④酒造りについて

北陸の日本酒は、特定名称酒の割合が全国の中で最も多い。特定名称酒とは、吟醸酒、純米酒、本醸造酒のことをさし、一方で、それ以外の酒は、普通酒といわれる。

近年、日本酒の消費量は国内では減少傾向にあるが、海外への輸出量は増加しており、特にアメリカ合衆国への輸出では、特定名称酒の割合が多い。また、海外では、日本食レストランが増加しているという統計もある。

2013年には、「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録された。これは、日本酒を見直す良い機会になると期待される。

このように、北陸では、特定名称酒にこだわった酒造りを行い、豊かな食材を活かした食文化と地酒文化の融合・醸成が求められる。

調査結果からの考察

①地域の自然環境と水を守る

酒を造る水は、厳しい水質基準をクリアする必要がある。また、酒造りに適した硬水や軟水が求められる。

北陸では、軟水の地下水や伏流水が豊富であり、これを利用した酒造りが行なわれている。

こうしたことから、酒蔵と地域が一体となって、まず、自然環境を守り、そして、地下水や伏流水を守り続けていくことが求められる。

②地酒のテロワール化へ

北陸の酒造りは、地域資源を活かし、地酒文化を育んでいる。また、特定名称酒の醸造割合が高く、海外でも人気を博している。

こうしたことから、北陸の気候風土や土壌・水質を守り活かし、技術を極めた酒造りを行い、食文化とも融合・醸成した地酒のブランド化に努め、ワインのように地酒のテロワール化を目指すことが求められる。

また、酒蔵を核とする地域づくりを進めることは、自然環境や水を守り、酒米作りや酒造りの担い手を育て、国内外の交流人口の増大など、地方創生にも繋がると考えられる。

③耕作放棄地に無農薬の酒米作り

耕作放棄地は、中山間地を中心に社会問題であるが、酒米を栽培している事例もある。また、営農者不足については、地酒ファンに酒米作りから体験してもらうことで、その地域の課題を解決しようとする酒蔵も存在する。

こうしたことから、「夏子の酒」のように、耕作放棄地を解決する手段として、無農薬の酒米を地域と一体となって栽培することが考えられる。

④地域と連携した酒蔵の多機能化

北陸の酒蔵では、酒造りだけでなく、酒米を作ったり、水を地域と共に守ったりする酒蔵も存在している。さらに、食文化にもこだわり、レストランなどを経営する酒蔵も存在する。

こうしたことから、今後は酒蔵が培ったノウハウやネットワークを活かし、地域と連携した酒蔵の多機能化が求められる。

④杜氏の志や匠の技を伝授

杜氏の減少、高齢化は否めないが、一方で、若い蔵人が酒造りを志している酒蔵もみられた。

酒の品質は作り手の技術によるところが大きいことから、杜氏の酒造りに対する志や匠の技を蔵人に出来るだけ早く伝承する必要がある。

こうしたことから、依然として、厳しい社会環境ではあるが、蔵人を酒蔵と地域が一緒になって育てるという姿勢が求められる。

おわりに

今後は、北陸の酒蔵とまちづくりの実態をさらに調査しつつ、酒蔵の多機能化や地酒のブランド化について調査したい。

また、付加価値の高い地酒をどのように北陸の地で育てていくか、地域と共にその物語を紡いでいくことが求められる。

丸亀城下町アーカイブプロジェクト

四国ブロック 大西泰弘



シロシタラボ <http://www.shiroshitalab-marugame.org>

□プロジェクトの背景

地方都市における人口の縮減の課題については移住人口や関心を持つ接触人口の増加策に着目されることが多いのですが、これだけでなく、積極的にまちに参加しかかわる「関与人口」をどう増やしていくのかが重要といわれています。この「関与人口」の増加と市民などが「参画意欲」を高めていくことは都市計画やシティプロモーション等における課題でもあります。

□プロジェクトの概要

香川県内で唯一城と城下町の町割りを残す丸亀市で、丸亀城下町の特徴を知ることができる公開情報は僅かしかありません。このプロジェクトは、丸亀城下町の情報データベースづくりを目指すと共に積極的にまちに関わる関与人口を増やすための手法を試みるものでもあります。初年度となる今期は試験的運用を含めて以下の事業を実施しました。

- 1) ホームページの開設
- 2) 既存情報データをホームページで公開

- ・歴史的建物、駐車場、空地など丸亀城下町の現状ほか、形成過程、丸亀城への眺望など

3) 基礎的知識共有のための講座の開催

- ・城下町の暮らし方講座 (3回)

4) 参画意欲向上の試み

- ・ワークショップで地域情報を編集・発信
「ウィキペディアタウン丸亀城下町の開催」
- ・古地図オープンストリートマップを用いて歴史との連続性を確認 (以下QR_codeから)

□シロシタラボの設立

プロジェクトの継続的運営のため、JUDI四国メンバーを中心に地域の研究者などが参加する任意団体「シロシタラボ」を設立しました。

・・・・・・ホームページはこちら・・・・・・



▲シロシタラボ



▲古地図アプリ

丸亀城下町アーカイブ・プロジェクトは、シロシタラボが行う研究・啓発活動です。
講座やワークショップを通じて丸亀城下町に残る町割りや建築について理解を深め、それらを地域の大切な資源として多様な視点から見直すための情報データベースづくりを目指しています。

[2016年度・城下町の暮らし方講座]

第1回《1月22日》 講座：「昭和の住宅から学ぶ」

戦後まもない昭和の時代、当時の社会変化と直面する課題に応じて行動した著名な建築家の姿勢とその住宅の試みから、丸亀城下町に残る歴史的建物の評価の視点を探ります。【講師／戸塚元雄】 会場：シロシタラボ

第2回《2月25日》 講座：「和室の成り立ちと変遷／室町から明治まで」

戦前の建物は概ねある種の「規範」の下につくられていました。これからの住まいと環境のあり方を考えるために、その規範とは何か、日本の住まいのルーツを分かりやすく解説します。【講師／戸塚元雄】 会場：シロシタラボ

第3回《3月19日》 講座：「丸亀城下町の多様性と可能性」

平成25年度と26年度に行った丸亀城下町の歴史的建物等調査から、丸亀城下町が持つまちのポテンシャルと、その力を引き出す考え方についての報告と意見交換をします。【講師／大西泰弘】 会場：シロシタラボ

第4回《5月21日》 ワークショップ：「ウィキペディアタウン丸亀城下町」

旧城下町に残る歴史の痕跡など地域の情報を、町を歩いて発見し、インターネット上の百科事典「ウィキペディア」に掲載するワークショップを開催します。【進行／中俣保志】 会場：丸亀市城乾コミュニティセンタ

第5回《6月24日》 報告会

「ウィキペディアタウン丸亀城下町・報告会」

ワークショップの成果、今後の展開などを報告します。【講師／中俣保志】 会場：シロシタラボ

既存調査データ

【丸亀城下町の情報データベース】 ※①②③は既存調査資料を元に再調査・編集し公開します。

① 丸亀城への眺望

日常の暮らしの中にある城の見え方データを収集し、丸亀らしさ、まちとの一体感、市民の共感、重要な視点場、ランドマーク、象徴性、帰属感など視点から評価し公開します。

② 丸亀城下町の道筋など

旧城下町の町割りや歴史的な道筋を対象に、成り立ちや来歴、通りの形態や建造物などの過去の痕跡、他その道筋や場所の特徴ある情報を集めて公開します。

③ 町家など歴史的建物

まちの多様性と活力を生む大切な要素として、町家など歴史的建物の情報を収集し、活用の可能性、場所性、歴史性、意匠性、規範性など視点から評価し公開します。

④ ウィキペディアタウン
丸亀城下町

ワークショップで編集し公開した掲載情報をフォローアップし、より充実したウィキペディア情報として公開します。

【今後の予定】

【講座】「近代木造住宅とは何か …明治以降の住宅の変化について」

【講座】「丹下健三と大江宏の足跡 …香川県に残された名建築を読む」等

【ワークショップ】丸亀城下町のウィキペディア情報をもっとつくる

【公開選定】残したい丸亀の町家 & 大切にしたい丸亀城への眺望



◎ シロシタラボについて

丸亀が心地よく暮らせる町になるためには、市民がこの町のことをよく知り、考え、議論し、行動することが必要です。すべては「知る」ことから始まります。
シロシタラボは、丸亀城下町の良さを知り、それを活かした暮らしを考える研究所です。

◎ 講師の紹介

戸塚元雄／戸塚元雄建築設計事務所 代表
中俣保志／香川短期大学 生活文化学科 教授
大西泰弘／有限会社田園都市設計 代表取締役

主催 ◎ シロシタラボ、都市環境デザイン会議四国ブロック 後援 ◎ 丸亀市（第4回及び第5回）

問い合わせ先 ◎ シロシタラボ／丸亀市中府町四丁目2-27 有限会社田園都市設計内 大西泰弘 ☎ 0877-85-5126

HP : <http://www.shiroshitalab-marugame.org> facebook : <https://www.facebook.com/shiroshitalab.margame/>

「地図アプリ」を用いた街理解の検証とアプリの改善方向の検討

関西ブロック 岡 絵理子

1. 「大阪こちずぶらり」アプリの構成

本アプリは5枚の地図と現在地図およびおよそ150枚の図絵によって構成され、GPSと連動し、地図上の特定の地点で地図間の行き来ができるとともに、絵図の描写地点も地図上で確認できる。

① 5枚の歴史的地図情報

- ◇17世紀中頃／大坂三郷及周辺図
- ◇1687年頃／新撰増補 大坂大絵図
- ◇1908年頃／正式2万分1地形図
- ◇1948年／米軍撮影空中写真
- ◇1974年／市街化過程および戦災図

② 二つの時代の風景・景観画

◇浪花百景：幕末に3人の絵師によって描かれた大坂の名所図会。

◇明治・大正大阪百景：野村廣太郎が描いた明治大正時代の風景画。このなかから町並みの特徴がわかる50景を抽出して示した。

2. まち歩きによる地図アプリの検証

① まち歩きイベントの概要

本地図アプリは、2016年11月に公開され、本年8月末時点でのダウンロード数は9000を越えた。圧倒的に日本で購入した端末でのダウンロード数が多いが、漢字を利用する台湾、中国、香港のダウンロードも一定数みられる。

これまで本地図アプリを用いたまち歩きイベントを3回実施しており（右上表）、その参加者にアプリについてのアンケート調査を実施した。

1回目、3回目は、実際にまちを歩いたが、2回目は屋根のない船で大阪の中心部の川を巡った。

② まち歩きイベントでわかったこと

まち歩きの満足度をたずねたところ、「大いに満足」、「満足」がほとんどを占めていたが、あまり大阪のことを知らない人や地図を見慣れていない人は、楽しめないのではないかと指摘があった。

楽しめた内容をたずねたところ、大阪の街への関心が高く、場所の基礎的な知識がある研究会メンバー（2回目参加者）は、「複数の時代の異なる

表 「大阪こちずぶらり」を使った
まち歩きイベントの概要

実施日時	まちあるきの場所	参加者	参加者の概要	人数
1回目 2017/2/23	中之島・北船場地域	JUDI理事メンバー	都市デザイン、都市計画、まちづくりに関わる専門家	10名
2回目 2017/3/9	大阪水の回廊めぐり（船）	研究会メンバー	大阪町歩きツアーを実施しているOSAKA旅めがねエリアルームメンバー、観光化されていない大阪を見出す「NPOもうひとつの旅クラブ」メンバーを中心とするまちあるきの専門家	6名
3回目 2017/6/10	大阪天満宮周辺	船場あるき隊	船場でまちづくり活動を実践しながらまちあるきを進める市民活動家	7名

地図の重ね合わせで、眼前のまちの姿をみながら、過去の様子に思いを馳せることができた」、「こうだったのだと聞き知っていたことを、その場で確認できた」のような、『知識の確認』を満足した点としてあげていた。

一方、大阪のこと、まち歩きをした地域のことの知識をあまり持っていないグループ（1回目、3回目）は、アプリより目の前にいる案内人の話術や知識に感心し、また訪問先の人の生の声を聞くことができたことに満足していた。

満足できなかった点は、「アプリを使いながらまち歩きをすると、説明を聞く集中力が途切れる」、「アプリを見ることに一生懸命になって、まちを行き交う人の邪魔になっていることに気づかなかった」との声があった。また、「昼間は画面が見づらい」、「歩きながらは見るのが難しい」という声もあった。

1回目参加者のこのような声を受けて、2回目の「夜に船に乗るまち歩き」を企画した。このグループは、研究会メンバーで、大阪の街の案内人をしている専門家たちである。「アプリで場所の過去の姿を確認することに集中しすぎ、ほとんど景色を見ることがなかった」、「アプリに集中しすぎて、船酔いをしそうになった」という声があった。

このグループに、船でアプリを用いることの有用性をたずねたところ、「水路の巡っている大阪では有用」、「自身が移動をしなくて良いので、次々現れる景色に興味尽きない」との声もある一方、

「船に乗ることを楽しめていないことが残念」との声もあり、その解決策の一つとして、それぞれがアプリの情報を探すのではなく、乗船している人たちみんなでひとつの大画面を見ながら、それぞれ気づいたことを共有することができるのではないかと提案が複数あった。

アプリ改良点についてたずねたところ、「現在の地図も入れてほしい（Wi-Fi のない状態では、現在の地図を見ることができない）」、「入っている地図の枚数を増やして欲しい」、「著名建築情報も入れて欲しい」のような情報量の増加を望む声があった。また、使い勝手については、「自分の端末では切り替わり速度が遅かった」、「電池がすぐに切れてしまった」、「画面が小さくて見にくい」といったハード面の不満があった。絵などが現れるピンについて、「大きすぎる」との声もあり、また、大阪を良く知るグループからは、「ピンの位置が視点場なのか、視対象なのかははっきりしない」、といった指摘もあった。

まち歩きの日初めてアプリをダウンロードした人たちの中には、「使い方がわからなかった」、「使いこなせなかった」ことを残念だという声があった。また、「案内人の説明が地図と連動して入れればよかったのに」、という声もあった。歩きスマホ防止のため、「端末をつけたまま動くと、画面が表示されなくなる」といった仕組みを搭載してはどうか」との提案もあった。

このように、本アプリは、大阪のまちに関する知識があまりない人々にとっては使いづらく、また使いこなすにはそれなりの「慣れ」が必要なのことがわかった。案内人が説明の一部にアプリの画像を用い、それを参加者全員が共有できるように大画面で見る、という使い方が提案された。一方、まち歩きの案内人をしてような、大阪のまちに関する一定に知識がある人々にとっては、「このアプリをその場所への入り口として使うことによって新しい発見をしたり、それをさらに掘り下げて調べるようなきっかけになるのではないか」、「情報を発表し合う場も欲しい」という意見があった。このアプリを持って特に動き回る必要はないということである。

今後アプリを使うシチュエーションとしては、タクシー・バス、大型ビジョンのある船、大阪環

状線や電車など、動く交通機関内での利用が挙げられたが、いずれも大阪を良く知る人たちの意見だった。

アプリの今後の活用についてたずねたところ、「自分の撮った写真も保存できるようにして欲しい」、「飲食店や小売店舗の情報も重なればいい」、「自分の歩いた経路が保存できれば復習できて良い」、「多言語対応できれば」、「その場所に暮らしてきた人の声や言葉などの情報もピンを立てて入って入れればいい」、との声があった。

アプリの可能性については、「さらに多くのまちでも展開して欲しい」、「自分で地図を追加できるようにして欲しい」という提案があった。

③ 地図アプリの今後

このアプリの開発を技術面でサポートした株式会社 Stroly(代表取締役社長 高橋真知、<https://stroly.com/about/>)では、すでに古地図だけでなく、手書き地図、絵巻物なども位置情報と連携して見ることのできるサービスを提供しており、地域の地図を重ね合わせる、まちづくりワークショップも提案し、実施している。

地図アプリの今後の活用については、自分の書いたイラストマップやイメージ図の重ね合わせや、自身の思いや思いつきのマップへの書き込みむなど、自分だけの地図づくり、地域での独自の地図づくりまで、様々な活用の可能性が考えられる。

また提供された地図アプリを手掛かりに、その他の時期や情報のある古地図のレイヤーの追加、絵図、絵画、写真を点情報として重ね合わせることによって、まちあるきや街案内の情報量を豊かにするツールとしてだけでなく、さらに深いまちの理解、予想を超えたまちの理解へと進んでいく可能性がある。

3. 大阪のまち理解のツールとして ～シナリオ作成の試み

本「地図アプリ」は、まち歩きのツールとして有効であるのみならず、大阪のまち理解のツールとしても効果的である。スマホやタブレットPCの小画面ではなく、大画面で活用できる精度をもっていることから、教室などの室内での講義等による利用も考えられる。そこでそうした利用を想定した、シナリオの可能性を検討した。

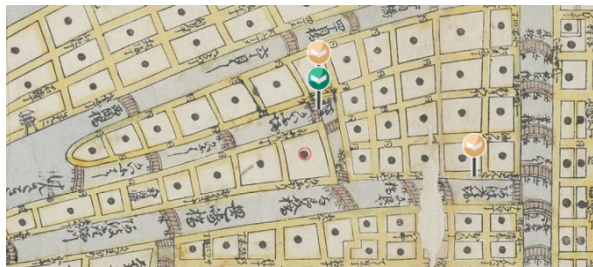
① 現在の都市空間の原型を読み取ることができるので、「正式2万分1地形図」からはじめるのが素人にも分かりやすい。大きな施設の敷地、近代的な名称の土地利用を探すといい。



例) 大阪城周辺 (上図)。

大阪城エリアには多くの軍施設があった。また森之宮にある JR と交通局の車両基地は城東練兵場だった (1908 年)。旧陸軍の練兵場で、日本の航空黎明期には飛行場としても使用。東西定期航空感による旅客・貨物輸送や報道機の離発着に活用された。

② 大坂三郷から南は四天王寺までの、江戸時代の大坂市街に着目する場合は、「新撰増補 大坂大絵図」からはじめるのがいい。



例) 錯綜する堀川と永代が浜 (上図)。

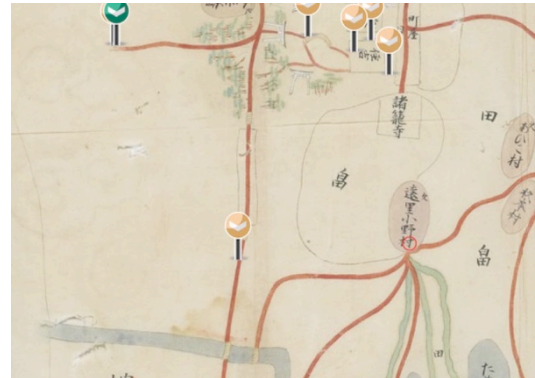
「永代濱 (浜)」は塩干魚や干鰯 (ほしか) 取引の中心地。1931 年の大阪市中央卸売市場の開場後に閉鎖、1945 年の大阪大空襲で一帯は焼け野原に戦後、占領軍の常用飛行場になった。

③ 上記の外側、大坂を取り囲む農村的なエリアに注目する場合は、「大坂三郷及周辺図」を用いるのがいい。

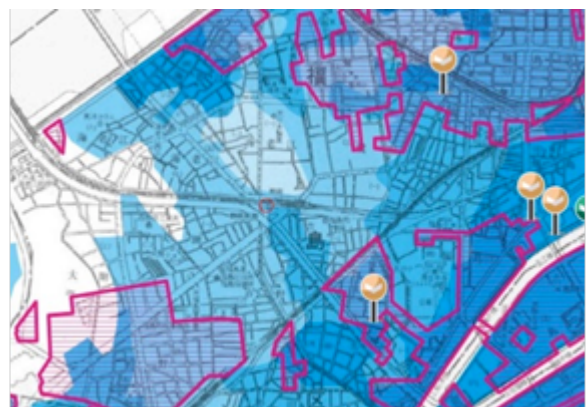
例) 大坂と堺の間、まだ大和川がない (右上図)。

浪花百景のピンは、「住よし大和橋」を示す (右上の下の図)。大和川に架かる橋で、紀州街道の堺への入口にあたる。住吉大杜の大祓の祭りでは、こ

こで住吉と堺の人びとの間で神輿の受け渡しが行われた。その時の数百の松明の灯が遠くからもみることができたという。



④ 密集市街地をみるには「市街化過程および戦災図」がいい。



例) 野田周辺 (上図)。

明治のはじめのうちは、江戸時代の市街地のまわりは無造作に市街地が造られた。計画と呼べる

ものは耕地整理であったが、これもすぐに密集市街地化した。こうした市街地で戦災を免れたものは今も密集市街地の様相を残している。

⑤ 「浪花百景」「明治・大正大阪百景」の気になる絵から探っていくのも面白い。

例1) 東横堀川のまがり(明治時代)『明治・大正大阪百景』(下図)。

大川から入りこんだ川の水は美しく、一帯は綿布の晒しや染物工場があり、高い物干しに多くの白布が干されている風情はよき画材でもあった。

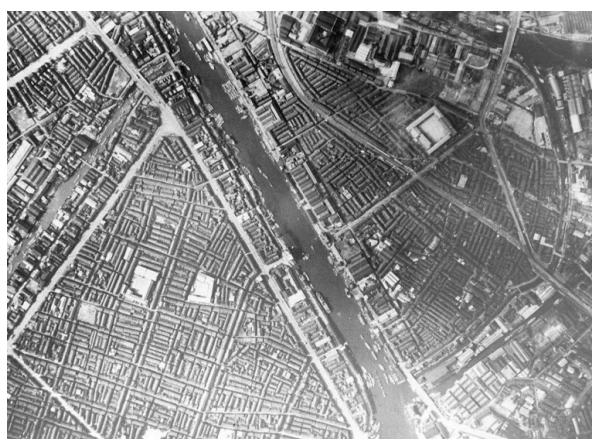


例2) 浪花百景 「うらえ杜若」(下図)。

浦江了徳院の聖天堂には、この辺りがまだ海岸だった頃、漁師の網にかかって海中から出現したと伝えられる歓喜天が安置される。境内の池は杜若で有名で、芭蕉も来訪し、句を残している。現在の「梅田」の地域は、江戸時代以前は下原と呼ばれる低湿地帯で、泥土を埋め立てて田畑地を拓いたことから「埋田」と呼ばれた。その雰囲気を感じられる。



⑥ 「1948年/米軍撮影空中写真」から探す。



例) 九条辺りの米軍航空写真(上図)。

上・下図は終戦直前の九条の航空写真(アプリには入っていない)で木造長屋が密集している。上の写真で戦災をまぬがれた長屋も多いことがわかる。

4. 終わりに

本地図アプリは大阪のまち理解のツールであり、手軽に利用できるようになることが作成者としての期待である。歩いてまちを知るツールであると同時に教室内でも活用できる。

教室内ではアプリで得られた情報を手掛かりに、他の情報と連結することによって、まち理解がさらに深掘りできる。

例えば、都市空間の要素に「変わるもの、変わらない・変わりにくいもの」が発見でき、都市環境デザイン上の知見の探索へと発展できる。

まちづくりへどのように活用するかの検討も今後の課題である。

講演会「これから、都市をつくる仕事」

～蓑原敬の構想力と思想を次世代に継承する～

九州ブロック 尾辻信宣

1. はじめに

福岡出身の蓑原敬先生をお招きし、九州で活躍する 30 歳台のプランナー・デザイナー・研究者とともに都市計画・都市デザインについて、それぞれが直面しているテーマや課題について意見を交わす会を開催した。

これまで第一線で活躍されてきた蓑原先生が先達として、これから活躍する若手にエールを送る会として、また JUDI 九州が専門家同士のネットワーク・交流を広げる機会となった。

この講演会を開催するに至ったのは、2016 年 6 月に本会の主催者代表である山下裕子氏と蓑原敬先生が、JUDI 関西の井口勝文氏が主宰した「歩行者空間による中心市街地の構成」(2015 公募型プロジェクト)でのインタビューに参加し、日本の都市空間論について激しくも深い議論を交わしたことがきっかけとなっている。第一線を退きつつある蓑原先生を発奮させ、先生が目指してきたこと、やったこと、やれなかったこと、次の世代に引き継いでもらいたいこと等が氏の中で湧き上がり、人と人を上手につなぐ山下裕子氏を媒介にこの講演会が実現された。

2. 講演会の概要

「これから、都市をつくる仕事 ～蓑原敬の構想力と思想を次世代に継承する～」

■日時：2017 年 2 月 27 日 (月) 19:00～21:15

■会場：アクロス福岡・円形ホール(福岡市中央区)

■主催：蓑原敬先生の話福岡でトコトン聴く会

■共催：都市環境デザイン会議九州ブロック、日本都市計画家協会福岡支部

■後援：日本都市計画学会九州支部

■実施メンバー：山下裕子(ひと・ネットワーククリエイター)、尾辻信宣(G計画デザイン研究所、JUDI)、福田忠昭(LOCAL&DESIGN、JUDI)、武田重明(大阪府立大学助教)、石橋知也(福岡大学助教)、黒瀬武史(九州大学准教授)、水谷元(atelier

HUGE)、榎本拓真(Local Knowledge Platform)、西海哲哉(日建設九州オフィス)、片田江由佳(UDCIC、JUDI)

■参加者：52 名(一般 26 名・学生 13 名、講師・メンバー 13 名)

※本講演会の記録集は JUDI ホームページのアーカイブに掲載しているので、詳細は記録集を参照されたし。あわせて、「歩行者空間による中心市街地の構成」(井口勝文)も参照のこと。



3. 登壇者の紹介



蓑原 敬 みのらはら けい

1933 年東京都生まれ。疎開で、代々の故郷である福岡に移住し、当仁小、附中卒、修猷館に 2 年まで在学、28 年卒扱い。東京大学教養学部アメリカ科で地域研究を専攻、卒業後、日本大学で建築を学ぶ。ペンシルバニア大学大学院に留学、アメリカの都市計画に触れる。建設省、茨城県で都市計画と住宅行政の政策立案と実施の現場を経験。1989 年(株)蓑原計画事務所を設立。



武田重昭 たけだ しげあき

大阪府立大学大学院生命環境科学研究科助教
1975 年神戸市生まれ。専門は緑地計画学。UR 都市機構にて屋外空間の計画・設計や都市再生における景観・環境施策のプロデュースに携わった後、兵庫県立人と自然の博物館にて生涯学習プログラムの企画運営を実践。



石橋知也 いしばし ともや

福岡大学工学部社会デザイン工学科助教
1980 年福岡市生まれ。博士（工学）（「戦後期の福岡市政における臨海部開発の計画経緯と影響に関する研究」九州大学 2014 年）。2005 年九州大学大学院工学府都市環境システム工学専攻修了、2006 年同助手、2008 年より現職。専門は都市形成史、景観論。



黒瀬武史 くろせ たけふみ

九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築学部門准教授 1981 年福岡市生まれ。東京大学工学部都市工学科卒業、同修士課程修了。日建設計都市デザイン室にて中東・ロシアの都市開発を担当。2010 年から東京大学都市工学科助教、清水港日の出埠頭の再生や岩手県大槌町の震災復興に携わる。2016 年から九州大学大学院准教授。専門はブラウンフィールドの再生、人口減少都市の都市計画。



水谷 元 みずたに はじめ

atelier HUGE／ヒュージ空間設計室主宰
1981 年兵庫県神戸市生まれ、福岡県福岡市の能古島で育つ。森岡侑士に師事。都市計画・まちづくりを学ぶため、兵庫県神戸市にて都市計画事務所に勤務。福岡市内の設計事務所にて、様々な建築・インテリアの設計に携わる。2010 年に atelier HUGE／ヒュージ空間設計室を設立。



榎本拓真 えのもと たくま

Local Knowledge Platform 合同会社
1982 年新潟県魚沼生まれ。博士（工学）、横浜国立大学大学院修了後、九州大学大学院学術研究員等を経て、2016 年 4 月より現職。これまで、大手私鉄事業者による交通戦略策定のコンサルティングやエリアマネジメント組織の運営、各種プロジェクト評価等に従事。その他、国連ハビタット（国際連合人間居住計画）コンサルタント等。専門は

都市交通計画、都市・地域計画、都市政策、交通政策。

4. 蓑原先生の論旨

この講演会で冒頭、蓑原先生は「我々が考えてきた都市計画の基本的な考え方の軸が大きく変わりつつある」との問題提起と先生の時代認識を示された。①地球温暖化による異常気象をはじめとした地球環境の問題に我々は直面していること、避けては通れないこと。②日本が少子高齢化社会になる一方で世界は人口 100 億人の時代に突入し、ヒト・モノ・経済の流れがダイナミックに変わりつつあること。③近代都市計画の理論が現代に通用しなくなっていること、根源的な考え方・哲学から改める必要性に迫られている時代を迎えていること、といった指摘をされた。一方で、若手の専門家・研究者の感性に期待したい、若手の感性と先生の理論を交換することで進むべき方向の手がかりを得たいとの趣旨であった。

5. ディスカッションの内容

日本の国土計画の是非、都市計画家の職能、縮退する社会の中での都市計画の在り様、マスタープラン不要論、都市計画のパラダイムシフト、多様化する価値観の中での合意形成、最近の危うい計画基準と制度の解体が進んでいること、福岡は地勢的にいいポジションにあること、まち（都市）は“総合的で主観的で生理的”に選ばれること、など様々なテーマの議論が交わされた。

6. この講演会で得たもの

記録集の結びでモデレーターを務めた武田氏が

「これまでの右肩上がりの時代とは異なった、予測のつかない未来に直面する中で、『これから、どう都市をつくるか』を考える際に、予定調和型のマスタープランは意味を持たなくなった。初めから描ける未来など、もはや存在せず、答えは日々の挑戦から見つけ出していくほかないのだ。その際に道標となるのは他者との熱心な対話による意見や批評だ。」と記された。そして、この講演会を通じて、30 歳代の若手諸氏と繋がり、意見を交わすことができたことが今後の糧となった。



ディスカッションの様子



控え室にて講演会前の雑談



終了後の蓑原先生とメンバー

カトマンズ盆地の歴史的環境を有する集落と市街地の自力復興に関する研究

関西ブロック ネパールゴルカ地震の復興の姿研究チーム

ネパールゴルカ地震について

2015 年の 4 月 25 日にネパールゴルカ地震が発生し、約 9000 人の方が犠牲になりました。地震により歴史的な建造物やまちなみに大きな被害が発生し、その文化的環境や景観が被害を受けました。景観を保全しつつ復興を推進するための状況を調査するため、2016 年 1 月にカトマンズの谷の世界遺産都市（カトマンズ、タメル、パタン、バクタプル等の都市部）の被災・復興状況の予備調査を行いました。さらに 6 月には、周辺の小規模な歴史的集落数カ所を調査しました。

(1) カトマンズ盆地の世界遺産地区のバッファゾーンと背後地の自力復興に関する研究

都市環境デザイン会議メンバーの主たる関心として、①歴史的景観の保全と復興の手法、②文化的景観の基礎となる地域の生業やコミュニティのあり方、③集落や小都市の空間構成や地域振興の姿などを調査しました。



写真 1

1) 調査活動の概要

①国内でのヒアリング①

テーマ：ネパールの震災復興における住宅再建事業について

対象：比較住宅都市研究会にて

参加者：永見光三氏（独立行政法人 国際協力機構 東北支部 震災復興担当）

時期：2015 年 12 月 4 日

場所：都立大八雲クラブ

②現地での予備調査

目的：調査地の概要、交通条件など

対象：バクタプル市、地区協議会、クワポ工科大学

参加者：堀口、霜田

時期：2016 年 1 月 9 日～14 日

調査地：カトマンズ、タメル、バクタプル、サク

③国内でのヒアリング調査②

テーマ：ネパールにおける震災復興モデル計画の策定状況の調査

対象：高橋亮司グループ長、梅村絢矢氏、加藤勝氏

時期：2016 年 4 月 24 日

場所：オリエンタルコンサツタンツグローバル

④現地調査

対象：地区協議会他、街角でインタビュー

参加者：堀口、若本、畑、松山、石原、霜田

時期：2016 年 6 月 2 日～9 日

調査地

6/3 カトマンズ

6/4 プンガマティ、コカナ、ハッシリディ

6/5 バクタプル、

6/6 ナガルコット、サク（別動カトマンズ、タメル）

6/7 キルティプル、パタン

6/8 バンディプル

2) ネパールの国情と復興の状況について

①地震発生前からの政情不安－復興の遅れ

ネパールは 20 世紀末まで国王を中心とした政治体制でした。2006 年までの 10 年間の内戦を経て大統領・首相制への移行、新憲法の公布、更に不安定な政権により大統領令が失効し人事の混乱など、国の統治機構が迅速に機能していませんでした。そのような状況の中で地震が発生したため、1 年が経過した今も満足な復旧・復興事業が進められていません。

震災発生直後から、ネパールに隣接し歴史的にも関係の深いインドと中国を筆頭に日本政府も無償援助のドナーとして名乗りを上げました。災害復興の資金援助とし

てインド10億ドル、中国5億ドル、日本は2.6億ドル（約320億円）の支援を当初から表明しているが、その支援を有効に使い切るだけの体制が整っていないため、ドナー間で連絡調整してそれぞれが別個に活動しているようである。

各国からの災害復興資金を元に、被災した世帯には各世帯に衣類などの見舞い金と、住宅再建のための再建資金20万ルピー（24万円）が提供されることになっています。しかし被害総戸数が50万戸と推定される中、自治体の能力の限界から十分な調査が進まず、住宅再建資金は1年間で700件程度しか支給されていない様子である（日経新聞2016年4月28日）。



写真2 道路を挟んで相互に支え合う建物（バタン）

②インド国境封鎖による国民生活の窮状

発災から5ヶ月後の2015年9月に新憲法が公布されました。その内容がインド国境付近に居住する少数民族にとって不利な内容であるため、9月末から2月5日まで国境検問所が封鎖されました。燃料供給の9割をインド国境からの石油の輸入に頼っているため、長時間停電や交通手段の不足により復興どころか市民生活全般が厳しい状況になりました。

予備調査の時期（1月中旬）は乾期で水力発電もなく、毎日13～15時間の計画停電が実施されていました。昼夜間を問わず電力供給を停止するため、携帯電話の充電やATM利用、レストランでの調理など、観光客にも大きな制約となっていました。燃料不足で暖房機器が使えず、市民生活は日々、寒さの厳しい夜を過ごしていました。

（2）世界遺産都市の状況

世界遺産「カトマンズの谷」はカトマンズ、バタン、バクタプルなどの町の寺院や広場の伝統的建造物群からなり、その中心的な環境を「モニュメントゾーン」とし

ています。有名なものはダルバール広場（カトマンズ）やパタンの王宮広場などですが、これらの建造物も震災により大きな被害を受け、今も修復工事を待っています。

さらに世界遺産としての指定はありませんが、同様に歴史的な集落や市街地が現存し、それらの景観を保存あるいは復元しながら、一部では国や自治体の力に頼るのではなく、地域住民が外部支援も得ながら自らの力で復興しようとするまちづくりが見られます。

世界遺産都市は観光面での経済効果も高いため、海外からの支援や国や自治体の力によって復興が進められつつあります。



写真3 旧王宮広場（バタン）



写真4

（３）伝統的景観の修復と復興

ネパールは釈迦が生まれた国であり、中国とインドという大国に挟まれながらも、長らくネワール族の王政が続き、独自の文化的アイデンティティを保持してきました。そのため集落や市街地の伝統的な住宅様式についても強い愛着を持っているようである。

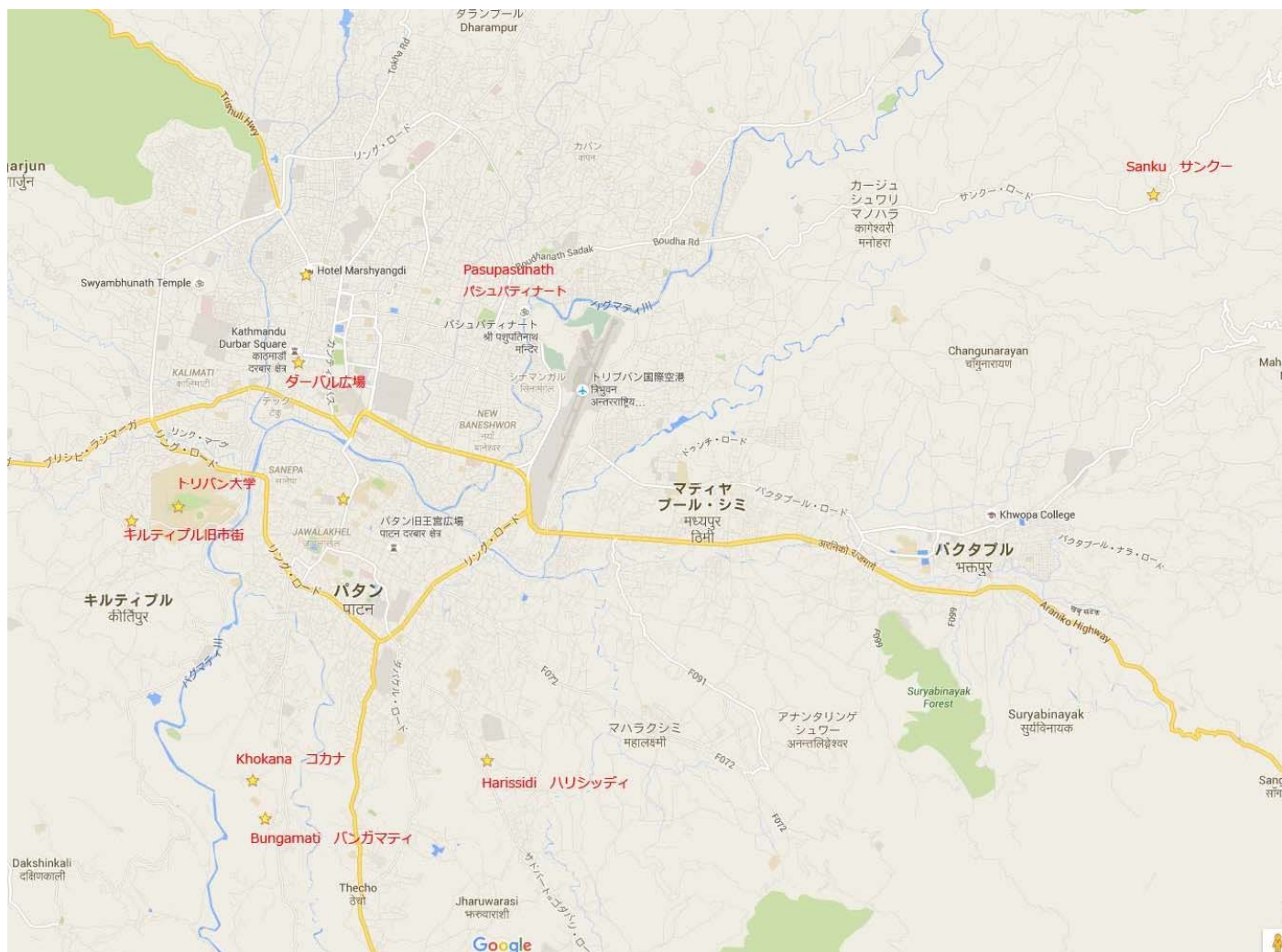
大規模な寺院がないため世界遺産としては指定されていないが、歴史的景観を有する集落や住宅市街地がカトマンズ周辺には数多く存在し、そのような地区では様式を維持しながら、近代的な建築物へと更新していく動きが各地にあるようです。協調的に伝統的な景観を保存しつつ建替えを進めようとしている段階で地震が発生したため、十分な保全活動ができずに多くの建物が倒壊しています。木造または組積造の 3～4

階建ての伝統的な建物は構造的に脆弱であり、残念ながら今般の地震により、そのまちなみを形成する相当数の建物が倒壊したようです。そのような地域では木製のバルコニー部分を保存・再利用して伝統的な姿を修復しようとする動きが見られます。

※再利用するために保存中の建材（サंक）

（４）小規模な集落での特徴

カトマンズ都市圏を構成する市街地の一部であるタメル、ボタンと共に、都市圏外周部に連担してブンガマティ、ハッシリディといった市街地があり、また農村地帯を挟んでコカナ、サクなどの古い集落を調査しました。



カトマンズ周辺の今回の調査都市（赤字）



カトマンズ



パタン 6/7



バクタプル 6/5



キルティプル 6/7



ハッシリディ 6/4



コカナ 6/4



ブンガマティ 6/4



サク 6/6



カルタイク付近 (ナガルコットの村)
6/6



バンディプル 6/8



バクタプル 6/5 (レンガの再利用)



伝統的な建築様式

北前船プロジェクトin防府

中国ブロック 山崎

■開催経緯

「北前船プロジェクト」とは

「地域でまちづくりや市街地活性化などの支援を行っているJUDI会員(HOST)の要請に基づき、全国のJUDI会員がHOSTを支援することによって、全国の都市環境問題解決の支援を行なう取り組み」

山口県防府市では、中心市街地活性化協議会が設立され、市は中心市街地活性化基本計画の策定に着手しようとしており、地元のNPO等による活性化事業構想の作成が行われていたが、中国ブロック山崎は、中小企業基盤整備機構の中心市街地サポートマネージャーとして、これへのアドバイスをしていた。地元のNPOなどの団体はまだ活動の日が浅いので、様々な専門家の集りであるJUDIに協力してもらい、活性化を推進したいと期待し、JUDIに支援要請を行った。

〈JUDIが、中活ビジョン検討会の開催に参加することとなった〉

日時: 2017年5月13日(土) 13:00~14日(日) 昼

場所: 防府市 天神ピア

北前船プロジェクトin防府

中国ブロック 山崎

■防府市の概要

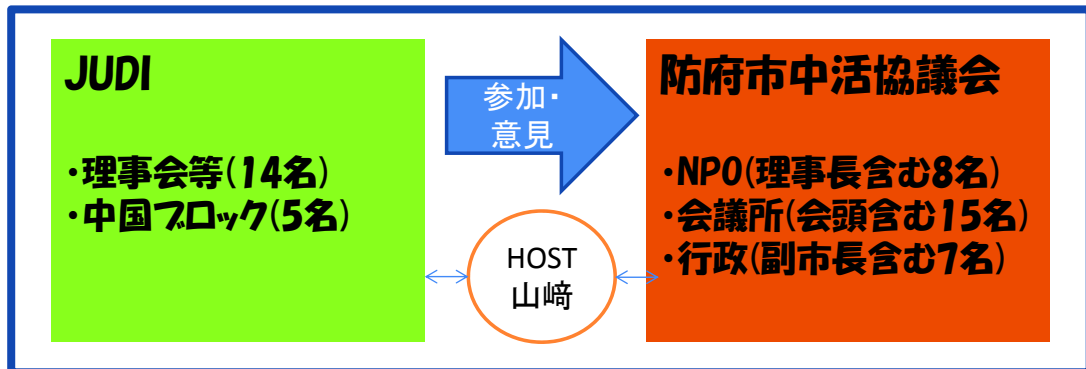
- ・ 防府市は、山口県中南部の瀬戸内海に面した市。
- ・ 人口は11万7千人。
- ・ 北前船の寄港地である三田尻港がある。萩往還の起終点。
- ・ JR山陽本線防府駅の北側から防府天満宮(日本三大天満宮の1つ)にかけての商店街や門前町が衰退。
- ・ 空き地が目立ち、現在、空き地はほとんどが駐車場となっている。



北前船プロジェクトin防府

中国ブロック 山崎

■中活ビジョン検討会の実施（およそ50名の参加）



■成果

- ・JUDIからの提言書を防府中活協が受け入れ
- ・JUDI会員からアドバイザー招致(中小機構AD登録)
- ・活性化ビジョンのフラッシュアップ→市の計画策定推進へ
- ・公募プロジェクトへの応募
- ・NP0が中心となって取り組む事業に反映されている